

戦前のセツルメント事業におけるキャンプ活動

—興望館セツルメントに見るキャンプ活動について—

国際基督教大学 高橋 伸

キーワード： 戦前キャンプ、セツルメント、夏期転住、フレッシュエアーキャンプ

1. はじめに

日本における教育・組織キャンプの始まりは、キャンプの捉え方によって異なるが、1911年(明治44)の学習院生徒対象のスカウト式臨海キャンプ、または1923年(大正12年)に日本 YMCA 同盟が中学生対象として日光で行ったものに始まったといわれている(1)。その後の日本における戦前の教育・組織キャンプの歴史的発展経緯については、ボーイスカウト、ガールスカウト、YMCA、YWCA などの青少年育成団体が実施してきたものが紹介されているが、今回の研究対象であるセツルメント(社会事業団体・施設)における夏期転住(キャンプ活動)については、研究論文や関連文献の記述などにもほとんど見られない。

東京における社会事業のキャンプ活動は、1919年(大正6年)に東京府慈善協会(後社会事業協会)の統率により、会員である数箇所の保育所が合同で比較的身体虚弱な保育児童を対象に、千葉県八幡宿の海辺で15日間の転住事業として行ったものが最初である(2)。その後、本格的にキャンプ活動が行われるようになったのは1923年(大正12年)の関東大震災以後で、東京の下町を中心とした不良生活地区にあった東京府慈善協会やアメリカ・カナダのキリスト教団体によって設立されたセツルメントが各々実施するようになった。昭和4年からは本格的な継続事業として東京府社会事業協会のもとに組織された東京児童指導者会によって、府下調布町の多摩川畔で共同キャンプが実施され、太平洋戦争間近まで毎年数多くの団体が参加して行われた。これらは劣悪な生活環境の中で暮らしていた生活困窮者の子ども達を、夏の一時期だけでも自然環境の良いところで生活させ、心身の健全な成長を促そうというフレッシュエアーキャンプであった。

興望館セツルメントも他の団体と同様、自らの事業の中にキャンプ活動を取り入れ積極的に行っていた。当初は他の団体のキャンプ場や多摩川畔の共同キャンプに参加していたが、さらに充実したキャンプを実施するため独自の道を歩むようになった。本研究は興望館のキャンプ活動について、その取り組みや経緯を把握するとともに、その果たした役割や意義を明らかにし、今後のキャンプ活動の示唆を得ることを目的とする。このような先人の足跡を認識し、その時代における活動を理解し、その業績から学ぶことは重要なことであり、今後におけるキャンプ活動発展の礎になると考える。

2. 研究の方法

興望館が1995年にまとめた75年史及び80年記念誌をもとに、興望館事業としてのキャンプ活動を調査し、その検証や当時の社会的状況の把握については、社会事業の機関紙「社会福利」や興望館の母体である矯風会の機関紙「婦人新報」、さらに東京都福祉事業協会75年史や関連図書を用いて試みた。

3. 興望館とキャンプ活動

興望館は1919年(大正8年)5月に、日本基督教婦人矯風会外人部関東部会の北米出身婦人宣教師などにより、ジェーン・アダムスが創設したセツルメント「ハル・ハウス」をモデルに、東京で同様の社会事業を行おうと本所松倉町で不良住宅地区の生活困窮者に対して託児、授産、診療な

どのセツルメント活動を始めたのがその始まりである。その後、関東大震災後の都市整備に対応して昭和3年南葛飾郡寺島町(現墨田区京島)に移転し現在に至っている。

興望館が最初にキャンプに参加したのは1924年(大正13年)にカナダ・メソジスト教会が行っていた愛清館セツルメントの千葉県竹丘で行ったキャンプである(3)。その後、キャンプ活動が年中行事として行われるようになったのは、1929年(昭和4年)に吉見静江が館長となってからである。吉見は館長になるべく1927(昭和2年)から2年間ニューヨークで社会事業を学び帰国した。帰国し着任した翌年から東京児童指導者会による府下調布町多摩川畔の共同キャンプに参加し本格的にキャンプ活動をはじめた。このときには興望館は共同キャンプの理事も勤め運営に協力している。しかしながら、共同キャンプでの限界と自らの目的達成のために独自で行えるキャンプ地の必要性を感じ、新たなキャンプ地として御殿場に移ることを決断した。さらにいつでも独自に使用できるキャンプ場の必要性までも感じ、1940年(昭和15年)には軽井沢に専用のキャンプ地を手に入れたのである。

4. 興望館キャンプの特色と評価

当時の興望館は地域に根ざした活動を通して「援助をもっとも必要とする者が自ら更生し得るために」という目標をもち事業を行ってきた。その中でもキャンプは「学童ノ善導」「近隣児童ノ全人格的発達ヲ補導ス」と吉見の残した記録にあり、このことについて「当時の社会で児童が一人格として取り扱われることは実に稀であった」と瀬川は述べている(4)。これらの目標を実現するために、地域を中心とした継続的な子どもの活動を実施し、キャンプ貯金をさせて経済感覚や自覚を促すなどの活動も行っていた。さらに、仕事や育児・家事に追われ疲れきっていた主婦のための母子キャンプや自立を促す青年のためのキャンプなど、地域のニーズとキャンプの効果を見据えたプログラムを実施した。

こうした興望館のキャンプについて堀江定一は昭和6年の共同キャンプにおいて「最も活動し、且最も内容の充実していた」(5)と述べている。また、谷川貞夫は「全人的教育を目標とするクラブの思想は(中略)新しい意識のひとつである。(中略)メンバー間に於ける相互的な教育作用は、夏期転住事業によって最も大なる効果を齎し得るであろう」(6)と述べており、直接ではないにしろ興望館キャンプの影響が読み取れるのである。

5. まとめ

興望館キャンプの最も重要な点は、経済的にも社会的にも恵まれない子ども達に対して、しっかりしたリーダーシップを持った指導者のもとで、先進的な目的を持って行われたことであろう。特に組織・教育キャンプの本源に関わる人格教育の実践に力を注いだことは特筆されるべきことである。戦前という現代と相反するような価値観の時代に行われたにもかかわらず、興望館キャンプの実績は現代にも充分に通ずるものであり、示唆に富む内容であると考えられる。

引用文献

(1) ザ・キャンプ 松田稔著 創元社 1978

(2) (4) 興望館 80周年記念誌 興望館セツルメントと吉見静江 興望館 2000.12

(3) 興望館セツルメント 75年の歴史 興望館 1995.10

(5) 「共同キャンプの批判的考察」堀江定一 社会福利 1934年 昭和9年7月号

(6) 「夏期転住事業に於ける基礎的要素」谷川貞夫 社会福利 1932年 昭和7年7月号